様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１４９３２

研究課題名（和文）わが国近代の２階建て和風住宅外観にみる二階座敷から家族個室への空間変容

研究課題名（英文）Transformation of space from second-floor Zashiki to private rooms in the exterior design of Japanese two-story detached houses

研究代表者
渕上　貴由樹（FUCHIKAMI, Takayuki）

佐賀大学・理工学部・助教

研究者番号：００５３０１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は戦前期に刊行された住宅書に掲載された平面図および言説を用いて2階建て独立住宅における2階座敷から家族個室への空間変容の様子を明らかにした。平面図からは大正9年に2階用途を家族用寝室に供する明確な変化を確認し、大正中期～昭和初頭に展開した生活改善運動による影響がその背景として考えられた。しかし階段の配置方法が2階用途に基づいて理論的な形成を成したのは昭和6年と一定期間を要した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
伝統的住宅が接地型の平屋住宅であったのに対し、明治以降に徐々に普及し始める2階建て独立住宅の成立過程の様子の一端について整理を行っている。今日では当たり前の姿ともみなされる2階建て独立住宅の誕生の過程についてはこれまで具体的に明らかにされてこなかった。住宅平面を階層的に捉え、かつ各階を統合して居住空間を考案するという思考がどのようにして発達したのか、こうした事象を歴史的変化の枠組みで捉えるための重要な知見になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the process of spatial transformation from a second-floor drawing room (zashiki) to private rooms in a two-story detached house, using floor plans and discourse published in housing books during the prewar period. The floor plans clearly indicate a distinct change in the use of the second floor as a family bedroom in the 9th year of the Taisho era, suggesting the influence of the lifestyle improvement movement that developed from the mid-Taisho era to the early Showa era. However, it took a certain period of time, until the 6th year of the Showa era, for the arrangement of stairs to undergo a theoretical formation based on the second-floor room use.

研究分野：建築史

キーワード：住宅近代化　2階建て　二階座敷　客間　階段　応接間　寝室　住宅書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国近代における独立住宅の変化の特徴の一つとして住宅の 2 階化、とりわけ居住空間の 2 階利用の進展があげられる。2 階建ての存在自体については近世の住宅建築、例えば裕福な商家や上級武士の住宅に確認でき、主屋の一部に 2 階居室が設けられる事例が確認されるが日常利用に供すことは稀であった。また庶民の住まいにおいては奢侈や格式的な問題から 2 階利用が自由の利く対象ではなかったこともあり、全体としては平家建ての家屋が主流をなしていたとされる。その後、幕藩体制の終焉とともに奢侈に関する家作制限が解除されたこと、さらには西洋式の２階建て住宅の移入、都市の高密化など幾つかの要素が重なったことで、住宅平面を重層的に捉える計画概念が浸透し、戦前期において 2 階建て独立住宅の普及が本格化したとみられている。日本の住宅における 2 階化の発達過程は以上のような流れを辿ることができるが、住宅近代化と 2 階化の関係については江面嗣人（2003）の著書にてその過程と背景について大局的に述べられているにとどまり、具体的な史料に基づきながら「いつ」「どのように」して展開したかについて詳細に検討されていなかった。

日本の住宅は、明治以降の近代的な住生活への追求により間取りの機能分化が進行し、日本の伝統的家屋の持つ部屋用途の曖昧さが徐々に取り払われていった。すなわち、日本家屋の伝統的「へや」概念は機能の曖昧さをはらむ前近代的なものと否定され、徐々に個々の機能を限定させた間取りの機能分化が進行した。こうした流れは現代の独立住宅に対する計画的な考え方に引き継がれ、その一つの到達点が、家族個室を 2 階に集約させた総二階建ての住宅の姿であり、現代家族の住まいの形式として広く普及した。本研究はそうした現代の総 2 階建ての平面形式の成立に至るまでの変化の初期の様子を把握することに繋がるものである。

・江面嗣人『日本の美術 449 近代の住宅建築』至文堂,2003

２．研究の目的

本研究は戦前期における 2 階建て独立住宅の室構成と住宅外観から当時の 2 階座敷から家族個室への空間変容の様子について検討する。戦前期の住宅に設けられていた 2 階座敷の用途を分析指標に用い、2 階用途が接客用途から家族用寝室に変化する時期およびその背景について明らかにすることを目的とするものである。

３．研究の方法

本研究は、2 階用途が接客用途から家族用寝室に切り替わる時期およびその背景について明らかにするために、以下の 2 点を検討する。

1）数量的傾向の把握から用途変化の時期を明らかにする。これには主として戦前期に刊行された住宅関係の単行本（以下、住宅書とする）を対象とする。そこに見られる図版（平面図、立面図）を抽出し分析を行う。なお戦前期に刊行された建築・住宅関連主要雑誌である『建築世界』『住宅』の掲載図版、記述についても当時の住宅動向を把握するうえで補完的に用いる。

2）住宅外観（立面図）の分析を行い、1）の結果を重ねて検討を行う。研究代表者（渕上 2018）は、研究開始以前に住宅書の掲載図版（2 階建ての間取り図案）を用いた分析を行っており、明治後期～大正中期頃の事例においては、2 階用途が接客用の 2 階座敷であり、かつ 1 階応接間の採用が低いという特徴について指摘している。通常、和館に洋風応接間を付加することは「中流住宅のシンボルとなるまで普及」したとも考えられており（木村 1969）、都市中間層の一種の社会地位表現としても見なされてきた。近世から明治以降も継続して用いられてきた 2 階座敷を一種の住宅外観の社会地位表現であると仮定的に捉えるならば、それが夫婦寝室や子供部屋といった家族個室空間に取って変わる際に、その代わりとして 1 階応接間が設けられる可能性も考えられる。この動向について住宅外観（立面図）から検証する。具体的には現存する住宅遺構調査から住宅外部意匠の要素抽出を行う。そして年代別・住宅規模からなる 2 階建て住宅の平面および外観の典型パターンを見いだすことで、2 階用途の変化過程について考察を行う。

しかし研究開始年度（R2 年度）から新型コロナウイルス感染拡大に伴う行動制限の影響を受け、上記 2）に関わる国内現存の住宅遺構調査が実施不可能な状況が長く続いた。そのため、結果的には上記 1）の研究方法（文献史料にもとづく分析）に注力することとなった。

・渕上貴由樹・内田青蔵：わが国近代の住宅における二階建間取りに関する一考察-戦前期刊行の住宅関係単行本における接客用居室に着目して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 905-906, 2018. 9

・木村徳国：明治時代の都市住宅-中産階級住宅の発生と中廊下型住宅様式の成立-（太田博太郎編『住宅近代史』雄山閣, p. 97, 1969. 5）

４．研究成果

本研究で得られた成果は大きく以下の 2 つに分けられる。

1）間取りの機能分化からみた 2 階居室用途の変化過程

図版として掲載された2階建て独立住宅の平面図を主体とした検討により、日本の伝統的住まいにおいて用途の曖昧性を包含していた「座敷」の動向に焦点をあて、2 階建てにおける座敷の有無および設置階、座敷の用途との対応関係を通時的に読み取り2階建ての間取りの機能分化の様子について分析した。具体的には戦前期に刊行された住宅書100冊を対象にして、それらに掲載された1,103例の2階建て間取り図案について、座敷の用途を「客間」「居間」「私室」「不特定」、そして「座敷なし」の場合も合わせて5つに区分し、1,2階における座敷配置の組み合わせと刊行年ごとの該当数を確認した。その結果、該当件数の多さとその継続性・時期から、図1に示す①～⑥の6つのパターンに整理することができた。

明治40年～大正9年までは1,2階双方の座敷名称が客間、すなわち接客本位の間取りが多く掲載されていた（図1_①）。ところが大正元年～9年にかけて2階座敷を客間、1階座敷を居間の名称に振り分け、上下階の用途を区分する傾向が現れる（図1_②）。①と②の関係から、大正中期にかけて1,2階座敷の用途重複が解消されていく様子が確認できた。

その後、大正9年から1,2階共に座敷なしの間取りが急増し、昭和8年まで継続的に掲出される。これらには1階の主要な部屋を椅子座にした間取り、すなわち西洋的な生活様式を強く趣向した提案が多く含まれていたが、中には2階に畳敷きの床座の部屋を確保するような案も散見された（図1_③）。このように上下階で公私の機能を分ける案が一方で、2階寝室の一部を畳敷きにして「今までの習慣」を残そうとする配慮もみられた。なお、この部屋の押入を床の間に変えれば、1階座敷なし,2階私室の配置となり、これに該当する間取りも同時期に一定数確認できた（図1_④）。

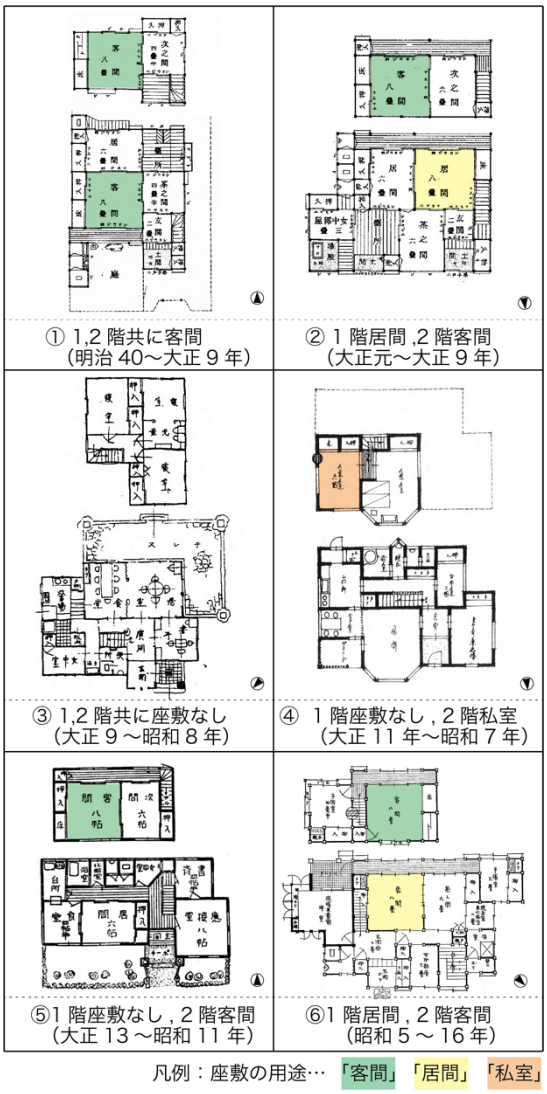


図1　1,2階座敷に対する用途配置パターン

大正9,10年を境に①,②から③,④,へと極端な移り変わりを見せた要因として、大正中期～昭和初頭に展開した生活改善運動による影響が第一に考えられた。とりわけ、その運動の中心的役割を担った生活改善同盟会が打ち出した住宅改善方針『住宅の間取及び設備の改善』（大正 10 年9月）の公表時期と概ね重なることにも注目された。すなわち椅子座の生活を基本とする住宅改善の方針に賛同し、間取りに反映させた住宅書がこの期間に集中して刊行されたことが、このような座敷の用途と配置の明確な変化として表れたと考えられた。

大正13年から昭和8年まで1階座敷無し,2階客間のパターン（図1_⑤）と昭和5～6年には1階居間,2階客間のパターン（図1_⑥）が掲出されるようになる。ここで着目されるのは、この頃になると椅子座の 1 階應接間が付加されるようになる点にある。とりわけ②と⑥は用途と配置の関係だけで見れば同一パターンであるが、⑥に関しては2階客間（畳敷）,1階應接室（板敷）と、床座と椅子座を想定した起居様式による和と洋の区別で上下階の接客機能に差異を与えながら、1階に接客用居室を用意している点で大正中期までの②のパターンと異なる。

以上のような過程から、2階建てを対象とした間取りの機能分化に対する模索の様子と見なせた。大正中期～昭和初頭における生活改善運動を一つの契機として、座敷を2階のみに残して接客用に特化する傾向と 2 階を家族寝室にあてがう傾向の 2 分化が見られるが、少なくとも前者については、それ以前に見られた1,2階双方の座敷を「客間」とした接客本位による公私不明瞭なる間取りから脱却が試みられていることは注目される。そしてその後に 1 階応接間の配置がその対応として読み取れた。すなわち、2階座敷（床座）での従来的な接客、洋風を基本とした1階応接間（椅子座）での簡易的な接客という起居様式による和と洋の差異化を含めた上下階の接客機能の分配が進んだことが明らかとなった。

2）間取りの機能分化に伴う2階建て平面の理論形成

住宅の上下階を繋ぐ唯一の存在である「階段」に注目し、階段に関する言説および間取り図案の分析から、間取りの機能分化に伴う2階建て平面の理論形成について検討した。

まず、住宅書の階段に関する記述内容を整理し、ある特定のパターンとして掲出できるものを階段に関する言説と位置づけ、それらのなかに2階用途に配慮した階段位置のあり方がいつ・ど

のようにして言及されるのかを検討した。
その結果、明治後期～大正期は下記のような記述が集中して確認された。

> 階段も亦今後大に改良を加へなければならぬものゝ一つである。今日に於ける舊式の階段は、階段と云ふよりは寧ろ梯子と云つた方が適切な位で、甚だしきに至つては約六十度位の傾斜をしてゐて、老人や子供や病人などに取つては、随分危險なものさへある。是れ程でなくとも大抵は手放しで昇降することの出來ぬ位勾配が急に出來てゐるので、物品の持ち運びなどには殊更不便であるが、これは何うしても手摺りに手を觸れずとも安全に昇降し得る位に角度を緩くしてなければならぬ。それには直線階段よりも折曲階段を選ぶ方が策の得たもの
（近間佐吉『模範図説和洋住宅建築集成』大正 9 年）

と、当初は在来住宅批判の一環として急勾配の危険性や不便さを伴う旧来的な階段の構造的課題の解消が目下取り組むべき課題として掲げられており、階段の急勾配を是正するために直線階段ではなく折返し階段を採用することが一貫して推奨されていた。したがって 2 階用途に配慮した階段の配置方法については、以上のような記述と同時進行で展開されることはなく一定の時間を要したことが分かった。2 階用途を加味された記述が現れるのは昭和 6 年以降であり、具体的には以下のような記述として確認することができた。

> 階段の位置は、二階の使用目的によつて其の置き方を考慮せねばならぬ。若し二階が客間に當てられてゐる場合は、玄關の近くに置くは勿論、家の奥廻りに關係なく上り下りの出來るやう配置することが肝要である。併し又二階が寝室である場合は、玄關に交渉なく上り下りし得る位置に配置せねばならぬ
（笹治庄次郎『通俗図解家屋設計の順序と仕方』昭和 8 年）

こうして 2 階が接客用であれば階段の位置を玄関から見て表側に、家族用であれば玄関を経由しない位置に、という用途で階段位置を導く記述方法は、住宅書の記述のなかには昭和 6 年以降になって出現したことが明らかとなった。
こうした言説の動向を把握したうえで、さらに 995 例の掲載図案から、間取りにおける階段の形状と配置、2 階用途との関係を時系列的に整理したうえで、2 階建て平面モデルを作成し、2 階用途に配慮した階段位置のあり方に関する言説出現時期との比較を行った（図 2）。その結果、2 階が接客用で階段が玄関に位置する事例が明治後期～大正中期に（図 2_A 案）、2 階が家族用の場合の対処としても表から玄関を経由しない通路に位置する事例が大正後期に（図 2_C 案）、と、2 階用途に配慮した階段配置方法が言説化されるよりも以前に、既に間取りとして先行して提案されていた様子を確認した。すなわち、「階段」に関しては急勾配の階段形状に由来する在来住宅批判とその改善提案としての折返し階段の推奨という階段に対する一貫した取り組みが大正中～後期に展開したため、これにより 2 階用途を加味した階段配置の言説形成が遅れたと考えられた。
2 階用途の変化にともない、計画的破綻のない間取りを即座に対応して提案することはできたが、そこに存在する計画概念を同時期に言説的に理論化するまでには至らなかった。すなわち住宅の部分に潜む旧来的課題への改善に取り組み、それを経たうえで全体性を伴う問題に言及されるというある種の課題解決の順序が存在し、2 階建て平面の理論もこれに組み込まれながら形成されていく様子を明らかにした。

| モデルの形成時期 | 大正初期～中期 | 大正後期～昭和初期 | 大正後期～昭和初頭 | 大正末～昭和初期 |
|---|---|---|---|---|
| 階段の形状 | 「直線系」 | 「折れ曲がり系」 | | 「直線系」 |
| 階段の配置 | 「玄関」側 | | （玄関を経由しない）「通路」側 | |
| 2階用途 | 接客用 | 家族用 | | |
| | A案 | B案 | C案 | D案 |
| 2階用途からみた階段位置の利点 | 客を玄関から直接2階へ導く | | 家族の上下移動（便所・浴室利用）の様子が玄関側から見えない | |
| 階段形状からみた間取りの利点 | | 効率的な間取りの配慮 | | 座敷の床・押入等の半間幅の有効活用 |
| 折返し階段の言説（大正中～後期に形成） | | 形成期～減少期 | | 減少期 |
| 2階用途に配慮した階段配置の言説（昭和6年以降に形成） | 間取りの方が先行 | | 間取りの方が先行 | 形成期 |

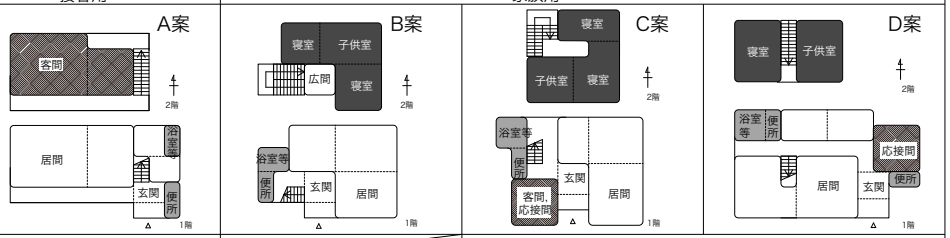


図 2　階段の形状と配置からみた 2 階建て平面モデル

以上 1）,2）の研究成果については、5. 主な発表論文に掲げるように、それぞれ日本建築学会計画系論文集にて掲載された。このように家族個室化に至るまでのプロセスおよび当時用いられたモデルについて平面的な観点から概ね明らかにすることができた。とりわけ大正 9 年を境に

して2階用途を2階座敷（接客用）から家族寝室への移行を促す傾向が見られ、それは当時の生活改善運動を一つの契機として働きかけられたものであったことを指摘できた。しかしながら接客用途を加味した 2 階座敷の採用がそのまま消失するのではなく、昭和初期にまで提案され続けた。そして昭和6年には階段の配置方法が2階を接客用とするのか、または家族用寝室にするのかの 2 者択一が可能な状況である程度平面的な理論にまで整理されたことが戦前期における2階建て独立住宅の平面的な発達過程の特徴の一つとして見ることが出来る。

当初は本研究の主題に掲げているように住宅平面の検討に対して住宅外観の検討を重ねることを念頭に置いていたが、コロナ禍の社会状況下により現存遺構調査が出来なかったため、住宅外観からの検討にまで至らなかった。今回は文献史料に基づく理論的な整理に終始したため、今後は実際に建設された住宅についても検討を行い、今回明らかとなった理論的な動向との差異について比較する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>渕上貴由樹,内田青蔵 | ４．巻<br>86 |
| ２．論文標題<br>座敷の配置と用途にみる 2 階建て住宅の間取りの機能分化－ 戦前期刊行住宅書にみる 2 階建て独立住宅の理念形成に関する研究 － | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>日本建築学会計画系論文集 | ６．最初と最後の頁<br>2720～2730 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3130/aija.86.2720 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>渕上貴由樹,内田青蔵 | ４．巻<br>88 |
| ２．論文標題<br>階段の形状と配置にみる2階建て住宅の間取りの変化- 戦前期刊行住宅書にみる2階建て独立住宅の理念形成に関する研究 - | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>日本建築学会計画系論文集 | ６．最初と最後の頁<br>282～290 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3130/aija.88.282 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|